ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.8 August 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

- 巻頭言
  「ほゝと言うて」
  ／堀内みどり 1
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（32）
  ニューヨークの日系人と天理教伝道 ③
  ／尾上貴行 2
- 日本語教育と海外伝道（13）
  侵略的日本語教育と国際交流のための日本語 ③
  ／大内泰夫 3
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（11）
  心理学・倫理学・教義学による反復＝出直しの三重奏
  ／金子　昭 4
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（18）
  仏典翻訳の歴史とその変遷 ①
  ／成田道広 5
- 遺跡からのメッセージ（48）
  弥生時代を再考する ② 森本六爾と唐古遺跡
  ／桑原久男 6
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（5）
  1. ラテンアメリカ基礎知識の話
  ／清水直太郎 7
- ニューヨーク通信（2）
  地域社会とのつながりを求めて
  ／福井陽一 8
- ヴァチカン便り（39）
  法王：政治家に一言
  ／山口英雄 9
- おやさと研究所ニュース 10

第 322 回研究報告会（金子　昭）／第 323 回研究報告会（中西康裕）／「第 16 回国際連合灌仏会を祝う会（The 16th United Nations Day of Vesak Celebrations [UNDV] 2019）」に参加して（堀内みどり）／2019 年度公開教学講座の案内／『グローカル天理』年間購読のご案内

巻頭言

「ほゝと言うて」

おやさと研究所主任　堀内みどり　*Midori Horiuchi*

「一つ心、我と我がでに我が身を責めるで。あちらでほゝ、こちらでおほゝと言うて居たらよい。又何でこうせにゃならん思い、心あちらでほゝ、こちらでほゝと言うて居たらよいのやで。一つの心が身に付き、何処も悪いのやないで。病でもない。心澄み切れば、そのまゝ何にも難しい事は無い。あちらでほゝ、こちらでほゝ、と言うて居たらよいのやで。家（うち）へ帰りて、篤（とく）と言うて聞かせ。」（明治 20 年 3 月　梶本松治郎父上身上の御願）

おやさと研究所は、月例で研究報告会を行っています。学内外の研究者の方にそれぞれの研究について語っていただき、質疑するというものです。6 月の研究報告会では、「115 歳定命」が取り上げられました。その報告会の終盤で、高見宇造先生が紹介されたのが、冒頭の「おさしづ」です。

定命が 115 歳と定まることが、「陽気ぐらし」の一つの様態を示しているとすれば、その時、人は、朗らかに「あちらでほゝ、こちらでほゝと言うて」居ることができるのでしょう。また、日々の暮らしの中で、「あちらでほゝ、こちらでほゝ」という一つの心が身に着き、「心澄み切れば、そのまゝ何にも難しい事は無い」人生になるとも教えられているようです。

教祖の暖かさが直に感じられ、その優しさが伝わってくるような言葉です。ところが、その言葉に心身を委ねてみることはなかなかにできにくいのが現実です。人には、「考える」力が与えられていますので、それでいろいろと考え込んでしまい、悩みの種を増やしてしまうこともありがちです。こういった場合、“自分”のことにとらわれてしまっていて、“相手”や“他のひと”のことに思いが至らないというような“我が身思案”になってしまっているということもあり得るでしょう。

ところで、この「あちらでほゝ、こちらでほゝ」という言葉は、もう 1 カ所、明治 29 年 10 月 5 日（陰暦 8 月 29 日）の「おさしづ」で説かれます（「梅谷四郎兵衛身上事情より定めたる事情願」）。

「皆々あちらこちら事情々々と解け合わん。解け合わんから、この一つどうも分からん。分からんから身に障り。……あちらほゝこちらほゝ。又あちら見てうはんこちら見てうはん、どうもならん。よう聞き分け。さしづ一つの理より頼り無い程に。あちら眺めてもほゝ、楽しみ知らしてある。なれど、どうもならん。めん〳〵で解けようまい。あちらこちらほこり〳〵、ほこり掃き取りて掃除せにゃならん。」

人はひとりで生きているわけではない、としばしば言われます。このような感覚・思いは「互いにたすけ」ということの土台にあるとも言えます。しかしながら、そうした人と人との関わりや繋がりがうまくいかない時が間々あり、「解け合わん」ということも出てくるということでしょうか。それでも「さしづ一つの理」によって「あちら眺めてもほゝ、楽しみ知らしてある」と語られ、最後に「（押して願）互い心運び合うてくれ〳〵」と願われています。

教祖の言葉（あるいは宗教の言葉）は時空を超えて、生きている人々に直に働きかけています。その働きを受容できるのも、心の自由があるからでありましょう。心を働かせ、「互い心運び合う」人と人の関わりが「社会」を善導していくことでしょう。

※7 月 2 日付で高見宇造所長が辞任し、永尾教昭学長が所長を兼任することになりました。当面、堀内がこの欄を担当致します。

ニューヨークの日系人と天理教伝道 ③

おやさと研究所講師
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

ニューヨークセンターの活動と展開

ニューヨークセンターは、1977 年の設立当初「伝道庁に心をつなぎ、その理を十二分にいただく」、「センターが単なる集いの場、親睦の場に終わらず、心を磨き、種をまき、徳を積む場所となるよう運営していく」との方針を定めた。そして、そのために「当時のニューヨークは、信仰上、陸の孤島の感があり、現地の人々にとって伝道庁は物理的にも精神的にも極めて遠い存在であった。そうした中、度重なる伝道庁巡教をいただく一方、伝道庁の婦人会、青年会総会に現地の代表を送るなどして、伝道庁がより近しい存在となっていくよう努力が払われた」（漁野 1993 年、13 頁）のである。

2017 年に設立 40 周年を迎えたニューヨークセンターは、アメリカ本土東部の天理教の中心的存在として、現在様々な活動を展開している。今回は、同センターやアメリカ伝道庁の機関紙の記録などから、設立からこれまでの歩みとして、主だった活動をまとめる。（これは筆者によるもので同センターの公式なものではない。）

開設（1977 年）～ 1986 年

1977 年 1 月に開所式が行われ、初代所長に上原真雄氏が任命された。4 月に第 1 回の少年会おとまり会が開催され、9 月にはニューヨーク地区婦人会が発足している。翌年に入ると、それまで半下りでつとめられていた月次祭のおつとめが 12 下りつとめられるようになった。また 5 月には、月次祭で初めて日本語と英語の両方で祭文が奏上されている。そして 9 月に天理教を紹介する陽気ぐらし講座が開催された。

1979 年 9 月、奥井俊彦氏が 2 代所長として着任。翌月から機関誌『センター連絡』（日本語と英語）を発行。これが現在の機関紙『せいじん』のもととなった。1981 年 7 月、中山善衛 3 代真柱がブラジル巡教の途次ニューヨークに立ち寄り、歓迎パーティーに 140 名ほどが参集した。これが一つの契機となって、それまで 20 ～ 30 名であった月次祭の参拝者が倍増し 70 名ほどになった。またこのころからおつとめの内容充実が強く意識されるようになり、1983 年 8 月には奉仕者全員がおつとめ着を着用し、スペースの問題から 4 人でつとめていたておどりを、2 列で 6 人に変更。また地唄の旋律を統一するため、3 代真柱のテープにあわせて、「みかぐらうた」の節回しの練習が行われるようになった。こうして 1984 年 5 月には月次祭参拝者が初めて 100 名を越えた。

開設 10 周年（1987）～ 1996 年

1987 年 2 月に、神床と参拝場を改築する神殿普請とニューヨーク伝道史編纂という 10 周年記念事業が発表された。同年 5 月、192 名の参拝者と共に 10 周年記念祭がつとめられた。6 月には、アメリカ伝道庁の 4 代庁長（在任 1959 年 10 月～ 1965 年 3 月）であった深谷忠政氏のおたすけが開始。以後 10 年間に渡り、毎年数回実施された。

この頃から布教活動推進のため、ニューヨーク社会との接点を求める計画が進められ、1988 年 11 月に日本語学校設立実行委員会の第 1 回会合が行われた。その後、現地での調査、アメリカ伝道庁や海外布教伝道部関係者との協議の結果、最終的に日本語学校を中心としたニューヨーク天理文化協会を、マンハッタン南部のソーホーに設立することが決定した。1991 年 2 月、日本語学校が開校し、9 月には第 1 回ギャラリーが開催された。

1993 年、増野正志氏が 3 代所長として着任。センター設置時には、布教所 1 カ所、ようぼく 15 人であったが、15 年ほど経過して 1993 年には教会 2 カ所、布教所 5 カ所、ようぼく数 140 人ほどとなった。

開設 20 周年（1997）～ 2006 年

「20 周年の旬にはおたすけ活動を芯とするセンターの活動と、にをいがけ活動を中心とする文化協会の活動、この二つを一つに一手一つに進むことを目標として進み」（寺田 2017 年、2 頁）、1997 年 5 月、20 周年記念祭がつとめられた。この直後に 4 代所長として森下敬吾氏が着任。森下所長は、すでにアメリカ伝道庁で柔道場を開設していたが、ニューヨークでも早々に柔道場を開設。7 月には、「にをいがけ」の一環として「第 1 回てをどりインマンハッタン」が開催された。またこの頃、ジャパンソサエティー主催「日本の祭り」でのお祓いや雅楽演奏、青年会によるエイズウォークへの初参加、また国際連合本部で開催された「諸宗教の集い」へのメインゲストとしての招待など、地域社会の様々な活動に参加するようになった。

1991 年に開設した文化協会は、財政的な問題やより活発な対社会活動展開の点から移転が検討され、2000 年 12 月に現在地グリニッジビレッジに移転した。翌年 2 月には文化協会設立 10 周年を迎えた。

2001 年に入ると、手狭な神殿を解消し、さらなる布教活動の展開を目指して、2007 年のセンター 30 周年に向けて、森下所長によって神殿ふしんが打ち出された。ふしん金を募るため、ヘアカット、フードバザー、ガレージセール、「感謝」T シャツの作成と販売など、様々な活動が行われた。またこの頃には、毎夏に教会本部で開催される海外子弟育成行事であるおやさと練成会の修了生によるパネルディスカッション、文化協会での子供日本語クラス開講、女子青年による「こかん様に続く会」初開催など、子弟育成への取り組みもいろいろとなされるようになった。

開設 30 周年（2007）～ 現在

2007 年 6 月、センター開設 30 周年記念祭がつとめられた。翌 2008 年、新神殿が完成し、12 月 7 日に神殿竣工及び奥井俊彦 5 代所長の就任奉告の月次祭がつとめられた。その後、2012 年 5 月には弓削マイケル氏が 6 代所長に就任、そして 2017 年 5 月には三濱治郎氏が 7 代所長に就任し現在に至っている。

センターの主な活動としては、月次祭（第 1 日曜）、Joy Workshop（天理教紹介講座）、Three Day Course、機関誌『せいじん』『Progress』発刊、てをどりインマンハッタン、天理ウォーク、ひのきしんデー、にをいがけデーなどがある。また毎週、柔道と雅楽の練習がそれぞれ行われている。さらに、婦人会、青年会、少年会、学生会の各会も、総会、鼓笛隊活動、南部・北部巡回などさまざまな活動を定期的に実施している。

［参考文献］
寺田好和「祭典講話」『せいじん』2017 年 6 月号、1 ～ 6 頁。
漁野徳明「ニューヨーク・センター」『海外布教伝道部報』339 号、1993 年 5 月 26 日、13 頁。

侵略的日本語教育と国際交流のための日本語 ③

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

教える立場から習う立場に

1994 年、筆者が現在勤める天理教語学院が開校した。その翌年、天理教海外布教伝道部長（当時）から留学の話があり、相談の上でソウルに留学生として派遣されることになった。韓国へは学生時代以来 10 年ぶりでもあり、日本語教師としては国内、海外での日本語教育も経験した後である。学習者の立場にまた戻るということで、大変貴重な経験ができたと感謝している。

約 10 年ぶりに訪れたソウルであるが、あまりの変わりように驚いた。すべてが近代化されたような印象を受けた。しかしその反面、ソウルの中心を流れる漢江にかけられていた聖水大橋の 1994 年の崩落、また 1995 年の三豊百貨店の崩壊があった頃で、急激な近代化が招いた歪みが現れているのかとも感じた。延世大学校言語研究教育院の語学堂に通い始めたが、教える立場から習う立場になって、授業を観察することで、客観的に授業はどう展開していくべきなのかを考える良い機会にもなり、学んだことは多かった。

アイデンティティ

海外に長期滞在するのは２度目であったが、自分が日本人であることをあらためて感じた。クラスには日本人、在日韓国人、在米韓国人、在ウクライナ韓国人、中国人、アメリカ人などさまざまな人がいた。在米韓国人は音声的にはネイティブ韓国人と変わらないが、文字・表記の面では弱いようにも感じた。日本人や在日韓国人はその反対で、苦手な発音などもあるが、テキストで勉強することも多く、文字には慣れているので、比較的読み書きは強い傾向があるようだ。それぞれの母語の影響で聞き取りにくいこともあったが、クラスの人とコミュニケーションは取れていた。日本へ来る留学生も日本語学校で同じような経験をしているのだろうと思うと、言葉が通じない初級の間はさぞや大変だと思う。フランス滞在中も語学学校のアリアンス・フランセーズに少し通ったが、言いたいことが言えないもどかしさはやはりストレスになる。こういった環境では、文化習慣の違いがあるだけにコミュニケーションがしっかり取れないと誤解や偏見のもとになる。異文化接触の場にいるとアイデンティティを意識させられることが多いが、アイデンティティで悩んだり、考えたりすることはしょせん些細なことだと学べる機会でもあるのかと思う。なぜなら、そのコミュニティを構成している皆があまりに多様だからである。共通のアイデンティティは「地球人」なのかもしれない。「おふでさき」の「せかいぢういちれつわみなきよたいや　たにんとゆうわさらにないぞや」（13 号 43）が思い起こされる。

不思議な出会い

ソウルの鍾路に時事日本語学院という大手の語学学校がある。時事日本語社という日本語教育関係の書籍を扱っている会社の日本語学校である。時事日本語学院の常任顧問である金照雄氏には滞在中、本当にお世話になった。留学中、韓国で日本語教育に関する書籍や教科書などを調べたくて、時事日本語社を訪ねて行ったのだが、日本でもアルクが発行している『月刊日本語』の韓国版の編集部を紹介され、とても親切にしていただいた。いろいろと教材を見せてもらいたいと申し出たのだが、逆に新刊書や会話教材などを譲っていただいた。代わりに取材を受けたり、記事を書いたりもした。筆者が天理から来ていると話したところ、金照雄氏は在日の方で韓国語を学んでいる時に、天理の方と一緒だったと話してくださった。筆者は大変驚いて、誰なのか聞いてみたら、同じ職場の先輩の名前や筆者が韓国語を習った恩師の名前が出てきて、さらに驚いた。そして「天理の人は親切だ」ということを言われた時にはとても嬉しい気分になった。天理教ではいろいろな国の大学に派遣留学生を送り続けているが、まさか自分の留学中に職場の先輩の名が出るとは思いもしなかったので本当に驚いた。人と人のつながりというのは不思議なものだと思ったが、それよりも天理の人は親切だという印象を持たれていたことが何より嬉しかった。「文化活動としての日本語教育」については以前にも述べたが、現地の人と接点を作り、時間をかけて交流を深め、いろいろ理解してもらうことが布教にもつながることを、あらためて考えさせられる。

日本語を学ぶ韓国人

朝鮮総督府が置かれ、国語としての日本語教育が行われたのが 1910 年から 1945 年までのことであるから、1995 年当時、国語として習っていた世代は 70 代から 80 代の方々だろう。滞在中に高齢の韓国人と日本語で話す機会はあまりなかったのだが、日本語を勉強する若い韓国人にはよく会った。もちろん外国語として習っている人たちだが、日本が好きで勉強しているという若い人も多かった。日本のアニメや歌も好きだという若者も多い。それはそれで結構だが、日韓の歴史的なことには関心がないのかとも感じた。筆者の勝手な思いに過ぎないが、韓国の若い人たちは歴史というのは学校で習う勉強の一つで、日本に対して特別な感情を持っているわけではなく、日本語の勉強も外国語として好きで勉強しているという印象を受けた。時の流れがそうさせているのかとも思う。日本で韓流ブームが起こり、韓国の映画やドラマが大好きな人が大勢いることと変わりないのかもしれない。そこから言葉や歴史に興味を持ち、研究する人が出て来てもおかしくない。このことは健全なことだとも思う。

大学生時代に初めて韓国を訪れた時には「伊藤博文、豊臣秀吉をどう思うか」など歴史、政治に関する質問が多かったが、関心事も大きく変わって、留学中そんなことを質問する人はいなかった。1988 年のソウルオリンピックから大きく変わったのだとも感じた。YouTube でも日韓の若い人たちが動画でお互いの国のことを紹介したりする時代である。国際交流のための日本語教育の時代が進んでいる証拠なのかもしれない。日韓の間にまだまだ問題は多いが、世代が変わり、「国際交流のための日本語教育」の時代に勉強した人たちには諸問題解決の糸口を見つけてほしいと願ってやまない。

心理学・倫理学・教義学による反復＝出直しの三重奏

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

八つのほこりの教えから

天理教では、悪しき心遣いが埃（ほこり）になぞらえて教えられる。それが「をしい（惜しい）、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまん（高慢）」からなる「八つのほこり」の教えである。これら悪しき心遣いはいずれも心理学の対象になりうると同時に、悪しき心遣いであることによって倫理学の対象にもなる。そして、この教説が天理教の教義として語られることで、教義学の対象ともなるのである。

信仰熱心な人が陥りやすい陥穽（かんせい）は、教義学こそ重要だと思い込んで、心中悩んでいる人に直接的にいきなり教義の言葉で語ろうとするところにある。しかし、そんなことをすれば、せっかくの言葉も悩める人の心に届かず、下手をすれば逆に心の傷口に塩を塗ることにもなりかねない。宗教は心の救済をもたらすものであるが、救済を受け入れる状態へと心のあり方を整える必要がある。そうした時に心理学が有効になる。また、教えが広く人の世に通用するためには、善悪の基準を考量する倫理学も欠かすことができない。

心理学・倫理学・教義学は、それぞれが別個の独立した学問である。どれか一つの学問に還元されたり、相互の従属関係に置かれたりすべきものではない。ここで求められるのは、心理学・倫理学・教義学を俯瞰することのできる一つの大きな視野の学問、すなわち人間学である。

『不安の概念』の人間学

そのような人間学的探究を、キルケゴールは『不安の概念』の中で行っている（彼自身は人間学という言葉は用いていないが）。この著作の副題は、「原罪という教義学的問題に向けて心理学的示唆を与える一考察」である。テーマはあくまでも「不安」の概念であるが、罪自体は心理学のテーマではないし、まして原罪に至っては心理学とは無関係の問題である。あえて罪が問われるとすれば、それは倫理学においてであろう。そして原罪となると、これは教義学（神学）が扱う。

しかし、「不安」という心的状態には、心理学・倫理学・教義学の問題領域が含まれているというのが、キルケゴールの見立てである。『不安の概念』では、心理学から倫理学を経て、教義学に問題を引き渡すという構成を取ることが序論で示される。しかし問題それ自体は、その本性上、逆に教義学から倫理学を経て、心理学にもたらされるものである。罪という問題がかかる境界領域（ディスクリーメン●レールム）にあるがゆえに、これを扱うにはこれら３つの学問の反復的往復運動が必要なのである。

実際、『不安の概念』は心理学的探究と称しながら、第１章でいきなり「原罪」論から始めている。しかし、そこから始めなければ、不安というものが説明できないのである。なぜなら、原罪はアダム（これは同時に人間をも意味する）の堕罪とともに始まるが、堕罪以前の無垢の状態（エデンの園）にあって、アダム（人間）はすでに不安に陥っているからである。精神はまだ可能性の中にまどろみ、善悪を識別する能力を持たない。まだ何も起きていない、いわば無の状態がそこにある。しかし、この無が不安を呼び起こす。不安とは、「可能性に先立つ可能性」として「自由の現実性」だからである。ここで初めて、不安というものが人間の自由と関係することが説かれる。

そして堕罪が起こり、この質的な飛躍によって罪はこの世に入ってきた。罪はまたそのようにしてたえず世の中に入りつつある。我々一人ひとりが現実のアダムなのだ。そして、不安も自由との関わりでたえず生じる。人間は霊的なもの（心）と肉的なもの（体）の総合であり、この総合は精神においてなされるわけであるが、目覚めた精神は自由なるがゆえに、たえず心と体の関係をかき乱していくのである。

自由の眩暈から反復＝出直しへ

高いビルの上から街路を見下ろすと、眩暈（めまい）がし、足が竦（すく）んでしまう。高度そのものが恐ろしいのではない。なぜなら、それよりずっと高いところを飛ぶ飛行機から眼下に広がる街区を見下ろした時には、そのような眩暈は感じないからだ。自分が足場の上に立って自由に動けるということそのことが、逆に眩暈を生ぜしめてしまう。不注意で、もしくは故意で落下してしまうのではないか。それが眩暈の元である。心の中には客観的な高さは存在しない。その意味では無であると言えるが、その無とは自分が落ちてしまうのではないかという可能性である。これが不安の正体なのである。

キルケゴールは、不安とは自由の眩暈であると言う。不安は可能性とともにある。現実性の中で不安は現実的可能性となる。しかし、この不安を抱くことは、人間が人間である以上、だれもがやり遂げなくてはならない冒険である。なぜなら不安は自由の可能性であり、人間の本質は自由にあるからである。不安によって教化されるものは、可能性によって教化される。不安にさいなまれることは確かに苦しく、不幸なことであろう。この不幸を嘗めつくすことによって、人は一切を失うかもしれない。しかし、そのことによって可能性を得ることができる。可能性とは無限性でもあるがゆえに、人は再び一切を取り戻すことができるのである。

ここに、反復、すなわちゲンテーエルセ Gjentagelse（やり直し、受け取り直し）のテーマが再登場する。人生とは人生を受け取り直すことであり、この受け取り直しの契機がなければ、人生は真の意味での人生にはならない。これを天理教の教語で表現すれば、「出直し」となる。出直しは死と同義に語られることが多いが、それは派生的な意味であって、本来はそうではない。それは象徴的に死を体験すること、一切を失うことで一切を取り戻すことなのだ。「みかぐらうた」に「こゝろえちがひ（心得違い）はでなほし（出直し）や」と歌われるが、拳を握って腕を振って一回転して元の位置に戻るのが、「出直し」の手振りである。反復、すなわち出直しのない人生は人間らしい人生ではない。そして人間が人間である限り、出直しはいつでも可能である。それは人間がその本質において自由であり、不安に鍛えられることで人間の可塑性が形成されるからである。

『不安の概念』という著作は、それ自体がすでに心理学・倫理学・教義学による反復＝出直しの三重奏である。本書の最後に、不安の探究は、その探究が始まったのと同じ場所で終わることが宣言される。心理学的探究が終わったところで、不安は教義学に引き渡される。すなわち、もう一度同じところで探究の仕方を変えて出直すのである。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ①

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

どのような思惟や学問もその歴史性と言語性を拭い去ることはできない。担い手である人間が、この宇宙全体の一部として、時間と空間という制約の中で存在し、言語を用いて生命活動を続けている以上、人間は必然的に歴史と言語を背負った存在となる。

しかし宗教においては、歴史性と言語性を超越した普遍的価値や存在を認め、その前提で信仰活動が展開される。それぞれの原典・聖典の示すものを、永遠不変の真理としてその普遍的価値を認めることで、自身の内面において信仰という絶対的な関わりが萌芽する。ただ、その原典・聖典の「ことば」がどのような意味を持ち、どう解釈するかという探求と求道は信仰者にとって永遠の課題となる。なぜなら、自己存在を含めてそのような探求と求道は、歴史性と言語性を伴わざるを得ないので、原典や聖典へのまなざしそのものに普遍的価値を認めることはできないからである。その意味において、原典・聖典の翻訳もまた同様に普遍的なものとして認めることはできないであろう。たとえどんなに優れた翻訳であったとしても原典・聖典と同格にそれを扱うことはできない。だからといってその翻訳が無価値であるということではない。それぞれの翻訳者による原典・聖典の詳細な分析と、「聖なる言葉」の探究によって紡ぎ出された数多くの翻訳を、歴史という時間軸において解体し、原典・聖典へのまなざしの諸相とその変遷を立体的に再構築すること、さらにその理解をもとに信仰者がそれぞれの宗教体験を通して原典や聖典が示すものの遡及を試みることは、普遍的真理に肉薄する手がかりとなる。

他宗教の原典・聖典の翻訳史と比較すると、天理教の原典翻訳の歴史はまだ浅く、その層も薄い。劫𧷤（こうろう）を経た仏典翻訳の嚆矢を求め、その変遷を辿り、伝道における翻訳の意義と役割について理解を深めたい。

仏典の言語

仏典翻訳の歴史をさかのぼると、その原典の言語はインド諸語であった。具体的には、それらはサンスクリット語、パーリ語、ガンダーラ語、そしてブディストハイブリッド（仏教混淆）サンスクリット語である。

インド諸語の中心はサンスクリット語である。「完成された言語」を意味するこのサンスクリット語は、日本では梵語と呼ばれている。サンスクリット語は古くからバラモン教の天啓聖典『ヴェーダ』の言語としてバラモンたちの口承伝統を支え、釈迦以前の時代からすでに典礼言語として広まっていた。精緻な文法体系と深遠な語義、そして哲学的性格を有するこのサンスクリット語は、インド世界において、長く規範的学術言語として機能してきた。ラテン語などと共に屈折語の代表例とされるこのサンスクリット語は、単数、両数、複数という３つの数概念、男性、女性、中性という３つの性概念、８つの格変化（主格、対格、具格、為格、従格、属格、処格、呼格）を有し、態の変化を持つ多語幹語が複雑に関係する非常に難解かつ洗練された言語である。インド諸語のルーツであるこのサンスクリット語から様々なインド系言語が派生して現代に至っている。

そのようなサンスクリット語とは対照的に、古代インドでそれぞれの地方において一般的に用いられた様々な俗語はプラークリット（自然言語）とよばれる。釈迦自身が話していたとされる古代マガダ語もこのプラークリットに分類される。上座部の仏典は、プラークリットの中では比較的サンスクリット語に近い言語でまとめられている。現在それらはパーリ語仏典と呼ばれているが、言語学的にはその言語はピシャーチ語というインド西部の地方語の一種であると考えられている。実は、「パーリ」とは元来、特定の言語名ではなく、「聖典」そのものを意味する語であった。スリランカで成立した伝統的な三蔵に対する注釈書『アッタカター』において、経、論、律の三蔵が「パーリ」（聖典）と称されたことから、その言語を慣例上パーリ語と呼ぶようになったのではないかと考えられている。（水野、1990：74）

インド世界の北西部の地方語、ガンダーラ語もプラークリットに分類される。ガンダーラ語は、現在のパキスタン北部ペシャワールからアフガニスタン東部一帯のガンダーラ地方で広く用いられていた。アフガニスタン西部のバーミヤンやパキスタン北部のギルギットでもガンダーラ語仏典写本が発見されており、この言語が南アジアから中央アジアにかけて広く影響を及ぼしていたことがわかっている。

それらの言語以外に、サンスクリットとプラークリットの混淆言語、ブディストハイブリッドサンスクリット語がある。この言語には、サンスクリットの文法的劣化や音韻の変化といった特徴がみられる。

４世紀、北インドでグプタ朝が成立すると、サンスクリット語は公用語化され、一般の知識人の共通語として定着していった。さらに、思想的性格が次第に台頭した仏教は、他の宗教とも論争や思想交渉を行うようになっていった。そのような教理論争には正統な学術語、サンスクリット語が用いられた。その結果、教理のサンスクリット化の必要性が高まり、次第に仏典がサンスクリット語で書写されるようになっていった。紀元前後に誕生したとされる大乗仏典はもともとプラークリットであったものが、サンスクリット語に翻訳されることとなり、以後製作された大乗仏典の言語はサンスクリット語になっていった。

もともと仏教では、釈迦自身も弟子たちも多種多様な地方語、プラークリットを用いて布教活動を展開していたので、布教の先々で広まっていた釈迦の教えはそれぞれの地方の言語、プラークリットに基盤を持っていた。サンスクリット語による教えの再構築の流れの中で、プラークリットとサンスクリット語の混淆が起こり、結果的にハイブリットサンスクリット語と呼ばれる現象が起きたと考えられている。

一方、原語のまま仏典を保持していたスリランカの上座部は、逆に伝統的な経典の言語の優位性を訴え、三蔵の構成と定義を明確にしつつ、５世紀にパーリ語三蔵を確立した。さらにそれまでシンハラ語で伝承されていた注釈文献などをあえてパーリ語に翻訳し、再編纂した。そのようなパーリ化の結果、上座部は多様な展開を見せたサンスクリット語仏典の思想的影響を斥けることとなった。

このように仏教では、サンスクリット化とパーリ化という二大潮流の中で、大乗のサンスクリット語文化圏と上座部のパーリ語文化圏が別様に展開していくことになった。

［引用文献］
水野弘元『経典―その成立と展開』佼成出版社、1990 年。

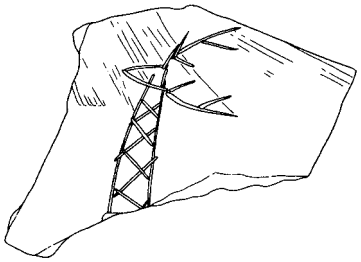
遺跡からのメッセージ（48）

弥生時代を再考する ② 森本六爾と唐古遺跡

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

天理参考館所蔵の絵画土器

天理大学附属天理参考館には、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡で採集された絵画土器の破片が３点展示されている。人物を描いたものが２点、鹿を描いたものが１点で、いずれも、もとは地元の飯田家が所蔵していた資料だ。そのうち、鹿を描いた１片には、「昭和十二年四月　池の西側北発見　父隆蔵」という墨書が内面に残されている（藤原郁代 1993「天理参考館蔵唐古・鍵遺跡出土の絵画土器について」『天理参考館報』６）。唐古・鍵遺跡といえば、戦前、唐古池の採土工事に伴う発掘調査で、弥生時代の「原始農業」の実態が初めて明らかになったことで知られている。３カ月にわたる発掘が終了したのが昭和 12 年（1937 年）の３月 28 日なので、土器の墨書に従えば、飯田隆蔵氏がこの土器片を採集したのは、発掘終了直後のことになる。採土工事では、池の西南隅の堤を壊してトロッコの線路を引き入れたのだが、絵画土器が採集された「池の西側北」のあたりは、当時、排土から土器片が採集しやすい状態だったのだろうか。人物を描いたもう１片の絵画土器片には、「所蔵品中発見　父隆蔵　昭和十二年四月十一日」の裏書きがあり、こちらは所蔵品の中から（再）発見されたようだ。



唐古・鍵遺跡採集の絵画土器
（図は藤原郁代氏による）

唐古・鍵遺跡はまた、隣接する清水風遺跡と合わせ、全国の絵画土器総数の半数にあたる約 400 点が一極集中し、絵画土器のメッカのような様相を呈していることでも有名だ。天理参考館の別の絵画土器片には、大正 14 年の年号を記したものがあり、地元の飯田家の人々が多年にわたって遺物の採集を行っていたことがわかる。こうした採集遺物が考古学者の目に留まり、大正６年（1917 年）に鳥居竜蔵博士が先駆的な発掘調査を行ったことで、唐古遺跡（唐古・鍵遺跡の旧称）が広く知られるようになる。大正年間、後に在野の考古学者として名を馳せる森本六爾氏も、畝傍中学校の生徒時代から足繁く唐古遺跡に通い、奈良県内の学校で代用教員を務めていた大正 11 年～12 年（1922 ～ 23 年）には、唐古池の周辺で、数カ所の試掘調査を行っている。

東京の学術雑誌に論文を寄稿するだけでは飽き足らなくなった森本氏は、大正 13 年（1924 年）、母校・畝傍中学校の先輩、高橋健自博士（東京帝室博物館）を頼って上京し、東京での活動を開始する。同年、唐古遺跡で飯田松治郎氏が採集した絵画土器を学界に紹介し、大小二頭の鹿が並んだ場面を「狩猟生活」を示すとしながらも、山辺郡（現天理市）の岩室発見の弥生式土器片に稲籾の圧痕が存在することから、「弥生式石器時代」の人々が狩猟採集の段階を脱して農耕の生活に入っていたと論じている（「原始的絵画を有する弥生式土器について」『考古学雑誌』14-4）。また、唐古遺跡の試掘調査で出土した土器や石器を詳細に報告し、飯田氏が採集した資料に銅鏃（どうぞく）が含まれることから、遺跡の年代の一点が「金石併用時代」になると考えた。

森本六爾夫妻顕彰碑

三輪山の麓近く、桜井市大泉の道路脇に、植栽に囲まれた一つの石碑がある。昭和 56 年（1981 年）に建てられたその石碑には、表面に「森本六爾夫妻顕彰之碑」の題字、背面に夫妻の功績を記した撰書が刻まれている。森本氏と畝傍中学校の同窓だった堀井甚一郎・奈良教育大学名誉教授による撰書では、森本氏が明治 36 年（1903 年）に同地で生まれたこと、独学で考古学の研究に没頭し、若年にして『日本原始農業』を著して天下に説を問うたことなどを記している。唐古遺跡の発掘調査については、「君の予見的中したるも相共にその成果を見ることなし」と記し、続けて、「嗚呼、二粒の籾、もし成長し結実しあらば」と夫妻の早世を悼み、その功績を讃えている。昭和 42 年（1967 年）、在野の考古学者、藤森栄一氏が著した森本六爾氏の伝記『二粒の籾』では、若き日に教えを受けた森本氏の生涯が闊達な文章で記されている。2019 年７月６日、NHK で放映された ETV 特集「反骨の考古学者 ROKUJI」は、まさに森本氏の足跡をドキュメンタリーで取り上げる内容だったが、そこでは、新発見の資料を紹介し、関係者のインタビューもまじえながら、『二粒の籾』の内容が役者の演じる再現ドラマの形で構成されていた。

森本六爾夫妻の顕彰碑（桜井市大泉）

さて、番組でも紹介されたように、上京後の森本氏は、フランスへの留学を経て、「弥生式土器時代」の研究に邁進し、ミツギ夫人とともに、自らが主宰する東京考古学会の会誌『考古学』や著書『日本原始農業』を通して、弥生式文化の原始農業論を論じ、全力で稲作農耕文化の実像を探ろうとした。しかし、昭和 10 年（1935 年）11 月、ミツギ夫人が病没し、次いで、翌 11 年（1936 年）１月、夫君の六爾氏も 32 歳の若さで同じく病没してしまう。ゆかりの地、唐古池の発掘調査は森本氏が他界した 11 カ月後の同年 12 月に始まり、多数の「竪穴」から出土した土器や木製品などの資料によって、森本氏が終生を通じて論じた「原始農業」を営む村の姿が明らかになった。学校で学ぶ歴史が皇国史観一辺倒だったこの時代に、実は、弥生時代に関する基礎的な調査研究が、森本氏を中心とする民間の研究者たちによって精力的に行われ、その総決算となったのが唐古遺跡の発掘調査だったのだ。昭和 18 年（1943 年）に刊行された同遺跡の発掘報告書『大和唐古弥生式遺跡の研究』では、発掘直後に地元の飯田氏が採集した絵画土器片も掲載された。今は天理参考館の所蔵資料となったそれらの絵画土器片は、９月９日（月）まで開催中の第 84 回企画展「祈りの考古学―土偶・銅鐸・古墳時代のまつり―」で展示されている。

１．ラテンアメリカ基礎知識の話

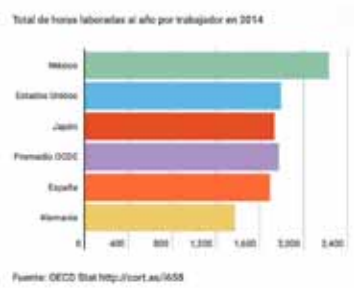
天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

１・５「労働とお祭り」

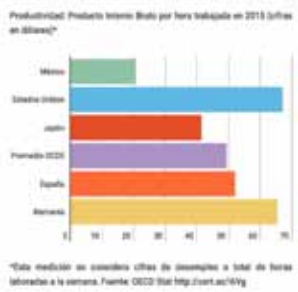
＊労働に関しての先入観

中南米の人はあまり働かないのではないかという先入観を、私たち日本人は持っているかもしれない。正しくもあり間違いでもあると考える。といっても「働き者・怠け者」を測定することは労働時間や生産性などの理論があり、かなり専門的になってしまう。地域や国に関係せず怠け者や働き者は存在するだろう。しかしながら、私自身の反省を告白すると、以前、私も、ラテンアメリカ人たちを偏見に近い見方をしていて「働かない」というステレオタイプの考えを持っていた。実際に、コロンビアやブラジルでの現地在住を体験した結果、現地の方の働きぶりを目の当たりにし狼狽（うろた）えてしまった。「彼ら（現地の人）はそんなに怠け者ではない、むしろ働き者ではないだろうか」と考えを改めた。例外もあるだろうが､私は言い切る。「中南米人は朝起き･働き」であると。

たとえば子供たちの学校の時間割は私立、公立の違い、また学校にもよるだろうが、コロンビアのカリ市では午前７時から始まるところが多い。終わるのは午後２時前後である。朝は午前５時半には家を出ないと間に合わない。早起きである。子供たちの学校登校の時間、午前６時前にはスクールバスが行き来している。出張所の前の建築工事は朝の６時から始まる。しかしなかなか完成しない。これは生産性と労働時間との関係による。経済協力開発機構のデータで、目についたのは労働時間の長さのトップがメキシコであることだ。２番目が韓国、３番目がチリと続く。中でも注目されるのが、労働時間と生産性の関係である（グラフ１、２参照）。



グラフ１「2014 年の年間労働時間の比較」
メキシコ、米国、日本、OECD 諸国の平均、スペイン、ドイツ



グラフ２「生産性：2015 年の労働１時間当たりの GDP（国内総生産：US ドル）」
メキシコ、米国、日本、OECD 諸国の平均、スペイン、ドイツ
この表の価は無職の数値は考慮していない。

出典：Mónica Cruz, ¿Por qué son tan largas las jornadas laborales en México? EIPAÍS. 28 Junio 2016. https://verne.elpais.com/verne/2016/06/28/mexico/1467068875_552344.html

この二つのグラフからわかることは、働いているのにその生産性が追いついていない、すなわち生産性が低いということだ。日本も生産性が低いということは今までも問題にされている。ただ、メキシコの労働時間の多さについて、あるコメントがありいかにもラテンアメリカ的であった。「歴史的にメキシコ労働者はいつも、労働者から搾取するために渡ってきた外国人や地主・農場主（雇用者）や外国人の命令に従ってきたからである」[(1)]。だから労働時間が長いとは限らないだろうが、命令に背くことは出来なかった。

フェスタ：お祭り

さて、労働があれば、余暇があり娯楽は付きものである。ダンスや音楽はもちろんスポーツ、ゲームも存在するが、ラテンアメリカ名物「お祭り」をあげたい。メキシコからアルゼンチンまでのラテンアメリカや非ラテンのカリブ諸国を含めて「お祭り：フィエスタ」が好きだ。ラテン的生活に言及するなら、この「フィエスタ」は外せない。個人的な誕生日や結婚式も一つのフィエスタ的イベントである。

スペイン語でお祭りの意の「Fiesta フィエスタ」と同義のポルトガル語での「フェスタ」という単語は、日本ですでに「市民権」を獲得しているように思う。たとえば「花フェスタ」や「スポーツフェスタ」などとよく聞いたり、見たりする。ラテンアメリカでは、小さな村でもそれなりのお祭りがある。昨年３月、コロンビア第４の街、カリブ海岸に位置するバランキージャ付近の集落で「梅祭り」に出くわした。「梅文化もコロンビアにあるのだ」と感心した。

＊ラテンアメリカ的お祭り

コロンビアのお祭りにはそれぞれ意味がある。日本では、地方の祭りは秋祭りに代表され、農業と深く結びついて、収穫への感謝や祈願をする行事というのが良く言われる。コロンビアの「フィエスタ」は宗教的な意味合いもあるが、非日常な行事である。彼らは特に、非日常的なことにものすごく反応する。日常から逸脱するのが好きなのである、ということかもしれない。簡単に言えば、「お祭り好き」。だからコロンビアだけで年間 3,000 以上のお祭り的イベントが存在すると言われている。あまり数多くあれば、非日常でなくなるのではないか、とも思うが……反対に毎日コツコツやる日常は苦手なのである。だから、とは飛躍し過ぎるかも知れないが、ラテンアメリカでは「貯蓄」が続かない。発想することも稀（まれ）である。メキシコのノーベル賞作家であるオクタビオ・パスは「お祭りには、特別な決まりが存在する。それはお祭りを浮き立たせ、例外日を作り出す。そしてある論理や道徳が入ってくる。それらは日常のそれらとはしばしば矛盾し、経済の範囲までも関係してくるのである」[(2)]。

また、スポーツの祭典というのも、「フィエスタ」的価値観があるのではないかと考える。例えば、サッカーのワールドカップ、南米カップ、クラブチームカップなどの「サッカー現象」がコロンビアでは 2014 年のワールドカップブラジル大会から今年 2019 年も未だに続いている。「続いている」というのは、コロンビア代表の試合があるときは、道行く人々、老若男女を問わず、代表チームのユニフォームを着ていて、街中が黄色になる。タクシー、バスの運転手さんも着ている。サッカーに詳しくない人でも街を眺めるだけで「あ、今日、コロンビア戦があるのか」と分かるくらいである。そして勝てば熱狂、負ければ静寂な国になるからだ。

ラテンアメリカのお祭り行事には、先ほどの非日常という意味があると共に、多様性の表現、多様な文化のお祝いを表現する役割もしている。日本においては三大祭りがあるように、コロンビア国内はもとより海外からも多くの人が訪れる「コロンビア五大祭り」がある。その一つにコロンビア南部、エクアドルとの国境近くのパストという街でおこなわれる「黒人･白人のカーニバル」がある。ユネスコの文化遺産にも登録されている黒人奴隷を起源に持つカーニバルだ。このお祭りの特徴は、色々な社会的な区別や人種、経済格差もある人たちが「同じサロン」で祝うことで、ここには人間関係の別の価値観がみられるのである[(3)]。

［註］
（１）Mónica Cruz, ¿Por qué son tan largas las jornadas laborales en México? EIPAÍS. 28 Junio 2016. https://verne.elpais.com/verne/2016/06/28/mexico/1467068875_552344.html
（２）¿Las fiestas de Colombia? Semana. 14 Febrero 2005. https://www.semana.com/on-line/articulo/las-fiestas-colombia/70808-3
（３）同上

ニューヨーク通信（2）

地域社会とのつながりを求めて

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

アジア系月間

5月は、「アジア・太平洋諸島系米国人の文化遺産継承月間」と定められており、毎年全米各地で歴史・教育・文化に関する様々なイベントが開催されている。5月が選ばれたのは、1843年5月7日に初めて日本人移民が米国に到着したこと、また1869年5月10日に大陸横断鉄道が完成したことである。これを記念して、1978年に制定された。ニューヨークでも、この月間に合わせてさまざまなイベントが開催されているが、ニューヨーク市では、この月を祝う意味で地域コミュニティーに貢献しているアジア系市民や団体を市長公邸に招いて表彰している。文化協会では、2004年に市が関係しているイベントを行い、それがきっかけとなり、それ以来市長公邸での祝賀会に毎年招待していただいている。この祝賀会には約1000名ほどの人々が出席しているが、日本人や日本のメディアはほとんど見られない。中国系、韓国系の人々が圧倒的に多く、日本はまだまだ市のアジア系コミュニティーに入り込んでいない現状を感じさせられる。その中でも文化協会が15年も前からつながりを持ち続けているのは、ありがたいことであり、さらに地域コミュニティーと深いつながりを築いていけるように努めていきたい。

弓削マイケル文化協会長：左とブルームバーグ市長（当時）：右（市長公邸にて）

源氏物語展 -Japan 2019

3月から6月中旬にかけて、ニューヨークのメトロポリタン美術館では、特別展「源氏物語」展が開催された。アメリカ国内や日本から国宝や重要文化財を含む約120点が出品され、日本国外では初めての大規模な源氏物語展と言われている。メトロポリタン美術館によると、会期中約20万人が訪れたとのこと。一つひとつの作品を熱心に見入っている大勢のニューヨーカーの姿が印象的だった。この企画はニューヨークを中心に全米で行われている「Japan 2019」の公式企画の一つで、メトロポリタン美術館と国際交流基金の共催で行われた。

「Japan 2019」に関連して、在外公館の推薦を受けて行われる民間のイベント「Japan 2019参加企画」という事業があり、現在アメリカ各地で合計46のイベントが企画されている。そのうち、文化協会では、展覧会や日本舞踊、能レクチャー公演など現在6つのイベントが在ニューヨーク日本国総領事館の推薦を受けて開催される予定だ。

海外安全対策連絡協議会

在ニューヨーク日本国総領事館には、海外安全対策連絡協議会（海安協）という会議体がある。ニューヨークの治安やテロ情報、日本人の安全対策などについて情報交換を行うために設置されて、日系の団体、メディア、旅行業界など約20の団体が参加して、会合が開催されている。この会に文化協会も入れていただいている。宗教団体としては入れなかったかもしれないが、教育、文化活動に携わっている団体として声をかけていただいたようだ。この会に入るきっかけとなったのは、ニューヨークの西側にあるハドソン川に日本人観光客が入水した母子心中未遂事件があったことによる。この母子は助けられたものの、母親が殺人罪に問われ逮捕されていた。領事館に連絡が入り、邦人援護担当の領事が間に入り、お世話されていた。もし、日本に信頼のおける身元引受人がいれば、釈放することも出来るとのことだった。担当領事は北海道出身だったが、子供の頃、近所に天理教の教会があり、いつも様々な人々を受け入れ世話されている姿を、ふっと思い出したそうだ。そして、天理文化協会に連絡が入り、日本の天理教の教会が保証人となり、無事に釈放された。そのことがきっかけとなって、海安協に参加させていただくことになった。北海道の田舎の教会の地道なおたすけ活動が地域の人の心に映り、遠くニューヨークの地まで伝わるのだと思うと感無量になる。ニューヨークに居る私たちも、日々の地道な活動が世界の人々の心に映っていくように夢をいだきながらつとめていきたい。

カンボジア写真展

文化協会がまだソーホー地区にあった頃、カンボジアの写真展が行われた。世界の遺跡を撮影する写真家・井津建郎（いづけんろう）氏の個展だった。井津氏は、カンボジアのアンコール・ワットを撮影中、地雷で手足を失った子どもたちを目の当たりにし、「写真を撮ることしか出来ない自分でも、何かできないだろうか」と病院建設を決意、そのためのチャリティー展示会だった。展示会の会期中に東京弦楽四重奏団のチャリティー演奏会も行われた。それらのイベントには、当時の小和田恆国連大使夫妻やカンボジアのシソワット大使なども文化協会に来られた。シソワット大使はカンボジア王子でもあり、将来は国王になるかもしれない。カンボジアに天理教が広まる時に何らかの力になってくださったらありがたいことと夢が膨らんだ。井津氏の地道な努力が実り、1999年に「アンコール小児病院」が開院した。現在カンボジアでは天理教が伸びていると聞くが、何らかの繋がりができればと楽しみにしている。

「天理な集い」ニューヨーク版

文化協会では、今後の活動を考えていく場を設けようとのことで、昨年8月から定期的に「天理な集い」が開催されている。これは、昨年の6月に中山大亮青年会長の巡教の後に出てきた新しい動きで、文化協会でさらに何が出来るか、若い人も年配の人も一緒になって話し合っていこうという場が誕生した。年齢や立場を超えて将来を語り、信仰の浪漫を共有しながら、ニューヨークの道を盛り上げていこうという動きが始まっている。

ヴァチカン便り（39）

法王：政治家に一言

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

政治家に一言

去る5月26日、EU議会の議員を選ぶ選挙が行われた。この選挙にも、昨年の3月から躍進が続くレーガ党（党首サルヴィーニ）が勝利を収めた。選挙後、レーガ党のコメントが流れた。「我々は選挙で勝利を収めた。法王は選挙で負けたのだ」という。このコメントはおかしいという反論が流れた。そこでは「法王は選挙に関係していないし、選挙についてのコメントも一切発していない。」「法王は今まで政治に関与したこともないし、これからもそれはないだろう。選挙についてのコメントも一切発したことはない。」「法王は『愛』の必要性、世界の人間の兄弟姉妹の大切さを説いているのだ。」などと言われた。法王はそれらの攻撃に対して、苦笑いをしながらも、正直に平和の精神を説いて自分の立場を守り続けている。法王の晴朗性、真実の働き、内部の信仰心の強固さ、これらはすべて自信をもって語られている。

ルーマニアへの司牧の旅の帰りの機内で、恒例の記者会見が行われた。あるジャーナリストの質問を記そう。「ローマへ帰着後、レーガのサルヴィーニ党首との謁見の機会を持つのか」という問いに対して、法王は会わないと答えた。つまり法王はサルヴィーニの謁見の申し込みを聞いていないのだ。秘書を通して謁見の申し出があれば、それに応ずるだろう。確かに、イタリアの首相コンテとは謁見した。これは正式に謁見の申し込みがあったからだ。実際に、サルヴィーニは謁見の希望を正式に申し込んでいなくて、SNSを通して「法王に謁見したい」と言っているだけだ。

法王の言葉は次の通りであった。「私は政治については全く無知である。特にイタリアの政治はわからない。確かに政治について勉強する必要はあるだろう。選挙の時の政治家の施政演説を聞いても、どこまで本気なのか、判断するのが難しい。私たちは政治家たちに正直であることを勧める。ウソつきであったり、ハッタリ屋であったり、スキャンダルを煽ったり、「恨み」や「恐れ」のタネを蒔くべきではない。」

法王はロムに謝罪

法王は司牧の旅として6月1日よりルーマニアを訪問した。ここ数世紀にわたって迫害や差別を受けてきたロマの人々に対して謝罪した。法王は次のように語った。「共産主義時代に殉教した9人の福者を祝福した後ミサが行われたが、その席上で、ロマたちはいわれなき迫害と差別を被ってきて、社会の一員として受け入れてもらえなかったのだ。カソリック教徒もその社会的傾向に加担してきたのだ。我々は一緒に歩むべきだ。お互いに兄弟心を持つならば、一緒に歩むべきだ。誰一人として後ろに残してはいけない。旅のモットーは一緒に歩むことで、巡礼するということは、少し雑然とした中に入っていくことだ。しかしその中に真の兄弟愛が芽生えてくるのだ。」

マリアに会える喜び

カソリックの巡礼の聖地としては、フランスのルルド、ポルトガルのファティマなどがよく知られているが、イタリアにも聖母マリアの巡礼の地として、アドリア海の中部地区にロレートがある。そこは盲目の人に霊験が現れるというのだ。その聖地ロレートに巡礼するために、多くの信者がマチェラータに集まり、一緒にロレートまで28キロを夜を徹して歩く。この行事はすでに41年間続けられている。この運動の創始者、ジャンカルロ・ヴェチェリカ氏は41年前にこの巡礼を提唱し、自らも毎年参加している。同氏は現在79歳であるが、いつも列の最前列の中央に陣取り、28キロの道のりを踏破している。道中は歌や聖書の一部の朗読の放送があり、ともかく賑やかに行進は続いていく。今年の参加者は実に10万人に達した。この巡礼のために、3,000人のボランティア、315人の聖書の朗読者、10人の道案内人が動員されている。さらに照明関係者が180人、水・軽食の準備者が100人、救急隊員が500人、そして180人がハンディキャップのある人たち50人を運んでいた。

大人も子供も痛みを超えて

イタリアではこの1年近くの間に、子供たちの心を傷める出来事が次から次へと起きた。昨年8月14日にはジェノヴァのモランディ橋が落下して43名の犠牲者を出した。橋の残った部分を6月全面的に解体し、新しく橋がかけられるように、工事を進めている。ジェノヴァは背後が山で、雨が降るとすぐに洪水となり、多くの犠牲者を出している。ナポリの近くのスカンピアには11歳のガブリエルが住んでいるが、彼は2013年のオナーニの大洪水で祖父のルチアーノを失った。彼によれば、その町では悪いことばかりが話されているという。法王は6月8日イタリア全土から、同じような境遇の子供たちを400人集め、子供たちに次のように話をした。「人生には、いろいろとある。楽しいことも悲しいことも辛いことも喜ばしいこともある。楽しいこと、喜ばしいことは幸せを感ずるだろう。しかし大事なことは、辛いこと、悲しいことがあった時にどのように過ごすかということだ。その時には、子供も大人同様に、痛みや、苦しみを乗り越え、神の愛にすがり、兄弟が互いに助け合う必要がある。」

ノートルダム寺院復旧の費用は

4月15日に火災を起こしたパリのノートルダム大聖堂の復旧費用はどこにいっているのだろう。火災があってすぐに、いくつかの大企業は復興費用に必要な金額はいくら提供すると公言した。その全額を合わせると、8億5千万ユーロとなる。しかし、今までに集まったのはわずかに、その9％のみということだ。火災後初のミサは、6月15日の18時に行われた。まだ崩壊の可能性があるため、ミサへの出席者はわずか30名と限定され、参加者は皆ヘルメットをかぶって身の安全を考えて出席した。イタリアでは、蜜のあるところには蜂が集まるように、財源のあるところには金をうまく手にして、逃げる人がたくさんいる。ノートルダム寺院の復旧作業には、そういう現象が起こらないように祈るばかりである。

前法王の生活

前法王ベネディクト16世は、2013年に法王を退位してから、すでに6年以上過ぎたが、常にヴァチカンのサン・ピエトロ教会の裏側の住居に起居している。よく散歩をするが、その際ヴァチカンの庭園の中を歩いている。そして、あちこちに据え付けてあるベンチに座り、思索に耽ることもあるようだ。しかし、なるべく外へは出ないようにして、現法王に迷惑がかからないように注意している。たまに現法王が訪ねてくることもあるが、沈黙を守り、あまり話をしないようだ。

第 322 回研究報告会（6月6日）
WCRP 日本委員会平和研究所の活動について

金子　昭

私は 2016 年 9 月より、学長室からの派遣という形で、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会平和研究所の所員として務めている。今日に至るまで、毎月の定例会議及び研究会を含め、平和大学講座、韓国 IPCR（宗教平和国際事業団）国際セミナーなどに出席し、宗教間対話の研究及び実践に微力ながら携わってきた。今回の研究報告会では、WCRP 日本委員会及び同委員会研究所の活動について報告した。

1．WCRP 日本委員会とは

1970 年 10 月、京都で第 1 回世界宗教者平和会議 World Conference of Religions for Peace（平和をめざす宗教の世界会議）が開催された。WCRP とはこの会議名から来ている。この会議には、世界宗教 39 か国から約 300 名が参加したが、以後、5 年おきに世界大会を開催している。本年 2019 年 8 月、Caring for Our Common Future（慈しみの実践―共通の未来のために―）をテーマに、ドイツのリンダウで第 10 回世界大会の開催を予定している。現在、WCRP 日本委員会平和研究所では、この世界大会に向けて日本からの提言を検討中である。

WCRP は、世界組織として WCRP 国際委員会があり、その下部組織として WCRP 各国委員会がある（WCRP 日本委員会もその一つ）。また、そのアジア組織として、ACRP（アジア宗教者平和会議）がある。日本委員会の正式名称は、公益財団法人世界宗教者平和会議日本委員会である。事務局は立正佼成会本部内にあり、事務局員もすべて同会から出向している。現在、会長（評議員議長）は庭野日鑛（にちこう）・立正佼成会会長、理事長は植松誠・日本聖公会首座主教、また本学の永尾教昭学長も理事として務めている。

この委員会の下に平和研究所が置かれ、現在、所長の山崎龍明・武蔵野大学名誉教授を含め 10 名の所員で構成されている。このほかにも、難民問題、核兵器禁止条約、気候変動、和解の教育などの特別事業部門（タスクフォース）、また青年部会や女性部会が設けられている。主な活動としては、① 諸宗教間対話・ネットワークを通じた宗教協力、② 啓発・提言活動、③ 平和教育・倫理教育、④ 人道的貢献、⑤ 女性部会・青年部会による宗教間交流があり、これら多方面にわたる活動を積極的に展開している。

2．平和研究所の活動

WCRP 日本委員会平和研究所は、WCRP 日本委員会の目的及び事業の達成に資するため、宗教と平和に関する諸問題の調査、研究及び提言を行うことを目的として設置された。具体的な活動としては、①月例の所員会議及び研究会、②年 1 回の平和大学講座の開催、③韓国 IPCR 国際セミナーへの参加・協力、④機関誌『平和のための宗教―対話と協力―』の編集及び刊行などを行っている。

このうち平和大学講座は、一般の人々を対象とした、平和と宗教を考える公開講座である。昨年 3 月には、「他者と対話するとは何か―平和な社会の実現を目指して」というテーマの下、天理大学ふるさと会館を会場に開催された。基調講演は永尾教昭・天理大学長が行い、パネリストに間瀬啓允・慶應義塾大学名誉教授、そして平和研究所員でもある松井ケティ・清泉女子大学教授がそれぞれ務めた。また今年 3 月には、第 10 回 WCRP 世界大会のテーマでもある「慈しみの実践―共通の未来のための宗教者の役割を考える」というテーマの下、大阪カテドラル聖マリア大聖堂を会場に開催された。このときの基調講演は庭野光祥・立正佼成会次期会長が行い、パネリストは吉川まみ・上智大学准教授と、平和研究所員でもある森伸生・拓殖大学イスラーム研究所長が務め、コーディネーターは私（金子）が担当した。

『平和のための宗教』第 11 号

3．活動に関わっての所感

平和研究所に携わって 3 年目を迎え、宗教間対話の重要性と難しさを強く感じている。現代は対話の時代であり、宗教者らしい対話をこそ、宗教界の内外に向けて発信すべきであると思う。実際すでに、さまざまな宗教間組織でこうした対話が行われてきた。国内でも、日本宗教連盟、全日本仏教会、日本基督教連合会、新日本宗教団体連合会（新宗連）、教団付置研究所懇話会などがある。近年では、目的別の宗教間組織として、同和問題にとりくむ宗教教団連帯会議（同宗連）、宗教者災害支援連絡会、宗教・研究者エコイニシアティブなどの活動も盛んであり、教えの違いを超えて人権問題、災害支援、環境問題など実践的取り組みを行っている。こうした試みは、現場の問題に即した宗教者の交流や共働として、今後もますます重要な活動となって行くだろう。

また宗教間対話に関して言えば、国際的にも国内的にもかなり進展を見せているが、一つ難しさを感じたのは、日本・中国・韓国の宗教者による東アジアの宗教間対話についてである。国同士の冷え込んだ政治的関係がそのまま宗教間対話にも反映し、私が 2 回参加した韓国での IPCR セミナーでも、歴史認識をめぐる問題などをめぐって、各国のナショナリズムの主張と宗教者の立ち位置が強く問われた。日本人はどちらと言えば受身的なところがあるが、国際的には対決を通じてこそ真の対話も可能になるので、批判的意見でも積極的に出していくべきではないかと、自己反省も含めて考えさせられた。

なお先述したように、WCRP 日本委員会では創設以来、立正佼成会が教団として事務部局を一手に引き受けている。各種の連絡調整、行事の運営、スタッフの派遣、参加者の動員、さらには相当の費用負担も行っている。しかも、これらはどこまでも「陰役」としての務めであり、立正佼成会の修行の一環だという。同会関係者の方々による、縁の下の力持ちとしての多大な尽力、またその謙虚な姿勢には、讃嘆を惜しまないと同時に、心から感謝を申し上げたい。

第 323 回研究報告会（6 月 27 日）
医学研究にみられる 115 歳定命の問題

奈良県立医科大学大学院 医学研究科博士課程 公衆衛生学専攻
中西康裕

1．はじめに

天理教教義において、人間の定められた寿命は 115 歳であると説かれているが、115 歳が限界なのではなく、心次第でさらに寿命は延ばせるものであると解釈されている。教祖在世時、70 歳以上の長寿者が稀（まれ）であったわけではないが、乳幼児の死亡率が現代に比べ非常に高かったことが影響し、平均寿命はおよそ 30 歳代半ばから後半程度であったとされている。また、現代では男性よりも女性の方が平均寿命は長いが、江戸時代においては出産による死亡率が高かったため、平均的に見れば現代のように必ずしも女性の方が寿命が長いとは言えない状況であった[(1)]。素朴な疑問として、「115」という数字は、何を根拠に説かれたものであるのか。なぜ 120 歳でも 110 歳でもなく、「115 歳」なのか。また、教学的に人間の定命が 115 歳であるということを、どのように解釈し説明すれば良いのか。これらの疑問は既存の研究では未だ明らかでなく、本研究は、今後の寿命をめぐる天理教学研究に対する問題提起として、近年の医学分野における寿命研究の成果を参考に 115 歳定命について考察した。また、寿命研究の中でも特に百寿者研究に焦点を当てて考察を試みた。

2．日本及び世界の最高齢者

百寿者研究を取り上げる上で、先に用語を確認しておくと、まず 100 歳以上の者を百寿者（centenarian）と言い、105 ～ 109 歳までの者を超百寿者（semi-supercentenarian）、110 歳以上の者をスーパーセンチナリアン（supercentenarian）と言う。2018（平成 30）年 9 月時点の日本人最高齢者は、男性では野中正造氏で 113 歳（1905（明治 38）年 7 月 25 日生）、女性は田中カ子氏で 115 歳（1903（明治 36）年 1 月 2 日生）となっている。田中カ子氏は現在（2019（令和元）年 6 月時点）116 歳で世界最高齢者でもある。日本のセンチナリアンの数は、現在約 7 万人（うち女性が約 88%）で、1981（昭和 56）年に 1 千人を超え、1998（平成 10）年には 1 万人を超え、2012（平成 24）年には 5 万人を超え現在に至っている。また、日本のスーパーセンチナリアンの数は、2015 年の国勢調査で 146 人が確認されており、これは日本の人口約 87 万人に 1 人ということになる。これまでの世界最高齢者は、フランス人女性のジャンヌ・カルマン（Jeanne Louise Calment）氏で、122 歳（1875 ～ 1997 年）が世界最高記録となっている。男性に限ったこれまでの世界最高齢者は、2013 年に 116 歳で死去した日本人の木村次郎右衛門氏である。

3．寿命をめぐる近年の医学研究

寿命をめぐる近年の医学研究の中で、2016 年 10 月に『Nature』に掲載された「Evidence For a Limit to Human Lifespan」という論文[(2)]が注目を集めた。著者は Jan Vijg を始め、米国のアルバート・アインシュタイン医科大学の研究チームである。彼らは、International Database on Longevity（IDL）及び Gerontology Research Group（GRG）に蓄積された世界の死亡年齢データを使用し、フランス、日本、英国、米国で報告された 1968 ～ 2006 年の「最高死亡年齢」に注目して分析を行った。その結果、世界最高年齢は 1990 年代後半から上昇しておらず、対象期間における最高死亡年齢は約 114.9 歳で頭打ちとなっていた。現代から過去約 100 年において、平均寿命や生存率は上昇しているものの、最高年齢は上昇していないことから、Vijg らは人間の寿命には「自然の限界」が存在するのではないかと主張している。また、統計解析の結果、今後 125 歳を超えるスーパーセンチナリアンが出現する可能性は、きわめて低いとも主張している。Vijg らの論文ほどマスメディア等で話題にはならなかったが、ほとんど同様の結果を示すフランスの Juliana da Silva Antero-Jacquemin らの研究チームによる「Learning From Leaders: Life-span Trends in Olympians and Supercentenarians」という論文[(3)]が、2015 年 8 月に『Journals of Gerontology』にすでに掲載されていた。彼らの用いたデータは、Vijg らも使用した GRG によるものであるが、Vijg らが対象期間を 1972 ～ 2015 年としているのに対し、この研究におけるデータの対象期間は 1917 ～ 2013 年である。西欧や米国、日本など高所得国で報告されたスーパーセンチナリアンの死亡年齢データの統計解析の結果、最高となる寿命は約 115 歳と推定された。Antero-Jacquemin らは、寿命のさらなる進展を制限する生物学的障壁が、一定の年齢で存在する可能性を主張している。

ただし、これらの研究に対しては厳しい批判があることに注意する必要がある。今後 20 年後、30 年後の世界において医学がどのように進歩するかは予測できないのであり、決して医学的に人間の限界寿命が 115 歳であると結論付けられたわけではない。しかし、115 歳定命の教義について今後さらに教学的に考察を深めるうえで、これらの研究成果には注目せざるを得ないであろう。

4．センチナリアンの医学・生物学的特徴

このほか、医学・生物学的な方面からの研究成果も多数報告されている。例えば、センチナリアンの医学・生物学的な特徴として、最も顕著な特徴は糖尿病が少ないと言われている。また、高血圧が少ないことや、心血管系の加齢性変化が少ないことも指摘されている。さらに、フレイルの進展を遅らせることで生活機能障害や認知障害を遅らせることにつながり、健康寿命をより長く保てる可能性があることも示唆されている。他にも、長寿である者の要因として、白血球テロメア長が短縮しにくく、細胞老化が起こりにくいことを示す研究も提示されている[(4)]。これらの研究成果から、特にスーパーセンチナリアンはその特徴として、ほとんど大病をせず身体機能の衰えも緩やかで、死を迎える直前まで健康であるということが言えるかもしれない。

5．おわりに

本研究は、今後の教学的展開に向けた問題提起として取り組んだ。人間の寿命がおよそ 115 歳程度である可能性が医学研究において示された今、寿命に関する教学的な考察をさらに深化させる試みが、今後必要であると言えるであろう。

［註］

（1） 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社、2000 年、174~183 頁。
（2） Xiao Dong, Brandon Milholland, Jan Vijg. “Evidence for a Limit to Human Lifespan” in *Nature* 2016; 538; pp. 257~59.
（3） Juliana da Silva Antero-Jacquemin, Geoffroy Berthelot, Adrien Marck, Philippe Noirez, Aurélien Latouche, Jean-François Toussaint. “Learning From Leaders: Life-span Trends in Olympians and Supercentenarians,” in *The Journals of Gerontology*: Series A 2015; 70; pp. 944~49.
（4） 新井康通・広瀬信義「スーパーセンチナリアンの医学生物学的研究」『日本老年医学会雑誌』55 巻 4 号、2018 年、578~583 頁。

「第 16 回国際連合灌仏会を祝う会（The 16th United Nations Day of Vesak Celebrations [UNDV] 2019）」に参加して

堀内みどり

標記大会が 6 月 12 日から 14 日かけて、ベトナムのハノイ市で開催され、世界各地から 3,000 人が参加者（一般参拝者以外）として参集した。2 日目に「地球的規模の指導者への仏教者のアプローチと持続可能な科学のために分かち合う責任（Buddhist Approach to Global Leadership & Shared Responsibilities for Sustainable Societies)」をメインテーマとした国際会議にて研究発表した。

開会式・閉会式の会場となったベトナム仏教協会本部。1 階が主会場。

11 日には国内の仏教指導者たち、国内の研究者による大会が行われ、12 日からは国連の担当者、ベトナム仏教協会会長、参加各国の首相・大臣などによる開会挨拶やメッセージが続き、インドの副大統領が基調講演を行った。12 日に行われた国際会議は、メインテーマのもと、以下の 5 つのサブテーマが設けられた。① Mindful Leadership for Sustainable Peace、② Buddhist Approach to Harmonious Families Healthcare and Sustainable Societies、③ Buddhist Approach to Global Educations in Ethics、④ The Fourth Industrial Revolution and Buddhism、⑤ Buddhist Approach to Responsible Consumption and Sustainable Development。堀内は①の部会で、インドの新仏教運動を立ち上げ、仏教へと改宗したアンベードカルと現在その運動とアンベードカルの趣旨を継承している佐々井秀嶺氏の活動について概説した。

UNDV は、1988 年スリランカにおける国際仏教会議によって表明された希望を承認し、1999 年 12 月第 54 回国連総会で、「ウェーサク（Vesak）の日の国際的認知」宣言が行われたのを端緒とし、仏教にゆかりの深い国が国際大会を催してきた。Vesak は、毎年 5 月（各国の暦による）の満月の日に仏陀の誕生、悟り、入滅を祝う日とされる。本来のウェーサーカ祭は、大乗仏教での伝承では、サンスクリット語でいう Vaiśākha（インド暦第 2 の月・ヴァイシャー）に該当する行事とされ、東アジアの灌仏会に相当する。UNDV のベトナムでの開催は 3 回目で、期間中、各宗派の読経や声明に合わせて世界の平和が祈られた。

天理大学おやさと研究所
2019 年度公開教学講座

信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（5）

場所：天理教道友社 6 階ホール
時間：午前 10 時～ 11 時 30 分
事前予約不要・来聴無料

第 4 回　9 月 25 日（水）　尾上貴行
58 話「今日は、河内から」
第 5 回　10 月 25 日（金）　島田勝巳
71 話「あの雨の中を」
第 6 回　11 月 25 日（月）　堀内みどり
73 話「大護摩」

『グローカル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は 1 月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の希望冊数と、氏名（フリガナも）、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮くださいますようお願い致します。振込みを確認後、発送させて頂きます。

送料（ヤマト運輸メール便）
全国一律、A 4（角 2）厚さ 1 cm まで（10 冊まで）82 円でお届けします。
11 冊以降は 164 円になります。
【例】
毎月 1 ～ 10 冊購読　82 円 ×12 カ月＝ 984 円
毎月 11 冊～ 購読　164 円 ×12 カ月＝ 1,968 円

問い合わせ先：
〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
天理大学 おやさと研究所「グローカル天理」編集部
FAX 0743-63-7255
E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローカル天理
第 20 巻　第 8 号　（通巻 236 号）
2019 年（令和元年）8 月 1 日発行
発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp
印刷　天理時報社
Printed in Japan
ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University